

## 万葉集の意義

中西進

「意義」ということばはあいまいだけれども、ここで考えようとすることは、万葉集とは何か、という自問に対する自答である。一々の和歌自体については、その作品としての文学的な意義は比較的捉えやすく、論じられる場合も多い。むしろそれが普通とさえ言つてよい。しかし、万葉集全体となると、事は俄かに模糊として来て、捉えどころがない。

このことは、濃厚に万葉集の作品集としてのあり方に、かかわっているだろう。一々の部分の意義は解明できても、全体のそれがはっきりしないなどということは、最初から統一的な意図のもとに述作されていった作品、たとえば現代の小説などの場合には、考えられないことである。古典にしたって、たとえば五人の女主人公を立てた「好色五人女」のような、オムニバスふうのものといえども、同様のはずである。

したがって、もしかりに万葉集に鮮明な一書としての意義を考えるなら、逆に最初からの編纂意図、理念、そして統一体としての構造を想定しなければならなくなる。たとえば古今集をはじめとする勅撰集が、おおむね集としての主張を序文の形で明らかにしているような、そうしたあり方を万葉集になぞらえなければならぬ。

このことは、先に述べた状態、すなわち、一々の和歌の意義はよく理解できても、集としての意義が捉えがたいと考える如き状態と、真向から対立する捉え方であろう。だから、問題は万葉集の意義を、あれかこれかと、同じ次元の上で選択するというのではなく、基本的に万葉和歌をどう見るかという、その事自身にかかわってくる。

そしてまた、緊密な構造体として意図され編纂されたということは、一回性の行為においても十分であるから、かりに万葉集に幾度かの増補を許容したとしても、当初の意志の持続、精神の破綻の拒否といった一体性を想定しなければならない。編者・編纂年代ともに「一」であることも望ましいわけで、野方図に、多数者の多月月を考えるわけにはいなくなる。したがって、万葉集の意図なる間に一つの答えを出すことは、万葉集のできあがり方そのものをどう捉えるかという、これまたもつとも基本的な事柄にかかわってくる。

私に、万葉集について幾何かの考えをめぐらしながら、総体としての万葉集とは何物なのかという問を、今まで後へ後へと送って来たのには、右に述べた如き重大さへの顧慮があったからである。

さらにもう一つ、万葉集の意義なることばの中には、いろいろな要素が含まれている。いや、万葉集が和歌の集である以上、和歌集としての意義しかありえないはずである。今日いうところの文学とはかなり異質だとしても、万葉集には文学的意義しか、ありえない。にもかかわらず、万葉集編纂を文学的営為と考え、文学者として

の成果を考えるという以外に、むしろ歴史的意義、宗教的意義といったものを考えることが、私の目につく。辛うじて、当時の和歌が今日的な文学と異なる性質をもっているという、この僅かな間隙にこれらの意見は足がかりを持つかもしれないが、それにしても、このことに自覚的でなければならぬ。そしてまた、この場合には、根幹の和歌とは何かという上述の問が、大きく関与してくる。

万葉集とは何かを問うことは、これほどに至難のわざで、私には目下答えが用意できたという自覚は、ない。おのずからに、従来考えて来た諸条件の指し示すところを、中間的に報告することになるであろうが、まず最初の里程碑として、以下に考えを述べてみたい。

二

まず第一に、万葉集の構造について述べるなら、万葉集全体にわたって「構造」とよべるような統一性はないと、私は考える。できあがり方にしても、ほとんど百年以上にわたって逐次増大していったもので、原資料の段階から一巻一巻が成立し、並べられるまで、きわめて多数の人間が関与していると思われる。さらに現在の二十巻は必ずしも「万葉集」のすべてではなく、増大のみならず減少すらあったようだから、極言すれば偶然性すら現形の形成に大きく参与しているようである。こうした考えに到る過程はここに述べないが、すでに何度も幾つかの面から考え進めた結果であり、大まかにいえば、各巻の成立過程と、平安朝以降の万葉関係歌のあり方と、万葉集の作者未詳歌の様子との、三点のよって来たる結果であった。

そのため、私は「万葉集の形成」ということばを多用してきた。伊勢物語については「生成」ということばが用いられるようであり、言いえて妙であるが、それらを斟酌した上で「形成」ということばがふさわしいと考えたのであった。したがって、「万葉集の構成」といっても、おのずから構成されたものであるにすぎず、最初から構成を意図された成書ではない。

それほどに、全二十巻は不整合だと考える。上述のように、現形が二十巻だというのに過ぎないから、整合しているはずはない。私は、従来、現形は三部構成といえろと、述べてきた。巻一から巻七までが第一部、巻八から巻十六までが第二部、そして以下が第三部である。

もしこのように考えなければ、巻六という賀歌を先立てて年次順に配列したものと、同じく晴がましく新しい風流をよそおう巻八との間に、無名歌のみを集めた巻七の存在する理由がとけない。現形は巻八について、また歌集をつぎ合わせた巻九をおいた後、また巻十一、十二以下の無名歌の巻々へと移ってゆくのである。これを巻七で切れば、巻六までの記名歌巻にそえて、無名歌一卷を置いたこととなり、巻七は、いわば付載的なものとして、理解できる。

巻七の体裁は、巻十一、十二より明らかに古い性格を示している。巻十二では「羈旅発思」として旅の歌が独立して扱われているが、巻七には、まだその取扱いはない。巻七は行幸従駕とおぼしい歌々を群としてもっているが、これを雑歌の末尾に連ねるだけである。また、巻十一には「正述心緒」「寄物陳思」と並んで「譬喩」が大きな部立として立てられてはいるが、これも同じ巻十一の内部ですら「古」とされる人麻呂集の方には存在せず、まして巻七には独立して扱われない。

このような巻七が巻十一、十二と同列に存在するものとして処理されるいわれはない。やはり、ここで一応の区切りをつけるべきであろう。

しかし、そう区切ったからとて、その後はすべてがきちんと整合するということではない。巻十が殊の外に新しいことは、さまざまな面に見られる事柄で、たとえば、すでに述べたことだが、

梅が枝に鳴きて移らふ鶯の羽白妙に沫雪ぞ降る

(一八四〇)

風に散る花橘を袖に受けて君が御跡としのひつるかも

(一九六六)

といった歌々は、もうほとんど古今集と変らない。このような一卷が途中に割って入っていることは、統一体としての説明をきわめて困難にしている。思うに、この第二部のできあがり方は、巻八という冒頭にふさわしい。巻の後に、第一部と上限を同じくする雄略御製を伝誦歌の中から抽出して据えた、歌集歌による記名歌巻をおき、そのさらに後に未詳歌巻を十から十四まで並べたものである。この中で巻十という当代の歌がもっとも重んぜられ、その後に「古今相聞往来」の二巻（成立時代は別）をおき、宮廷詞章たる巻十三、東国の歌々の巻十四をおく、という形である。これにつく巻十五、十六は第二部の付録的な二巻である。

これが第二部のできあがり方で、それなりの理解をもって人々は接したのであろう。しかし、これは企画されたものでも、何らかの文学的意図を具現しようとしたものでもない。

以上は第二部を主として述べたが、第一部における不整合も、指摘できる。巻一、二の原形が同じ範疇からできていることは後にもふれたいが、巻三が相聞にかえて「譬喩歌」をあげるの、すでに恣意的である。そして次の巻四に相聞一卷を立てることも、厳密な作業とはいえない。

ましてやこの次に巻五という個人性を強く漂わせた一卷を介入させて巻六につなげるといふのは、意図としてまったく考えがたく、おのずからにしてかく成ったという理解の方が、はるかに素直である。むしろ巻五は、巻六がわから押し上げる形で天平期の資料をここに位置せしめたというべく、その資料性において、前四巻に付加したものである。

巻六がわといったのは、田辺福麻呂を中心とする立場のことで、ここに吸収された雑歌集団は、巻五と同時代に発し、それ以後の歌々である。その一まとまりも、巻一〜四までの作業とは別個の性格をもつものである。

巻十七以後の第三部は、家持およびその周辺によって筆録された未編纂の資料で、しかもこの天平宝字三年の終末も、大原今城と家持との、偶然的な関係によってもたらされたもので、何も必然性のあるものではない。性格は前二部とまったく別種のものである。

こうして、全二十巻はできあがり方を説明することはできるが統一体ではなく、いろいろに不整合である。一応三部に区切ってみることは、その形成の過程を明らかにし、それなりの各巻の意義を示してくればするが、もちろん三部仕立ての万葉集が、誰かによって企画されたわけではない。

したがって、優に万葉集の中の一巻を形成してよいと思われる歌巻は、他にも多く存在していたであろうという推測が、可能である。早い話、歌経標式には万葉集と類同する歌が、作者名を同じくしたり異にしたりして出てくる。古歌の作主が異なっているのは万葉集の常態だから、それら異作者による別の万葉歌巻があってもよかつた。たとえば万葉集巻一で川島皇子の歌と伝えるもの（三四）は万葉集巻九では山上の歌と伝え（二七一六、歌経標式では角沙彌の歌と伝える。角沙彌作を主張する別の歌巻があってもおかしくはないのである。

また歌経標式に鏡王女の歌と伝えるものは、万葉集に見当らない。これなども現歌巻には採録されなかった歌で、それを載せる別歌巻があつてもよかつた。

そしてまた、平安朝以後の文献に見える歌で、万葉歌人の作とされているものが、まったく架空の仮託名と思われぬ場合も、少なからず存在する。たとえば三十六人集の「家持集」とか「柿本集」の歌で、奈良朝の歌らしく思われるものがある。それらは確実に、現万葉集が当該時代の歌のすべてを収めていないことを物語っているのであつて、他の歌巻も存したのではないかという空想を楽しませてくれる。

そこで、もしこれら別歌巻が存在したなら、それらはどのような様相を示すであろう。第一部においては、巻七と同じような未詳歌を収めた歌巻が、これについて収められていたかもしれない。先に巻七を第一部の付録的な巻だと見たのは、その可能性をも許すことになり、次々と巻八、九、十と並べられても差支えないと、私は考へる。もし現巻七が緊密に巻六、巻八と結ばれているとしたら、そのようなことは到底不可能なのだが。

また、巻五と類同の別歌巻も他に存在した可能性がある。巻五は山上憶良が筆録に大きく関係をしているようだから、同様な筆録を、他の誰彼に考えてもおかしくはない。大宰府関係者でいえば麻田陽春、小野老、大伴百代といった人々がいる。坂上郎女には筆録が想定されるが、これは巻六などの中に吸収されて解体してしまつた。すでに述べたことである。

万葉集に歌集を残す者は人麻呂、虫麻呂、金村、福麻呂だが、他に有数な歌人がいないわけではない。高市黒人、長意吉麻呂、そして山部赤人ら、彼らが筆録の歌群をもたなかつたとしたら、むしろその方が不自然だろう。現に巻七の一部は黒人集ではないかという意見が土居光知氏にあり（『古代伝説と文学』）、賛成者もいる。意吉麻

呂、赤人らにそれぞれ集があつてもよかつたろうが、後に編まれた卷九に見えないところを見ると、むしろ卷五と憶良のように、半ば他者と混淆する形で筆録が残されたという想像も捨てがたい。

そしてこれら著名歌人の特色には、その作を後々に継承するというふうがあるから、ある先代作家の作を次の某作家が包み込む形で次に伝えるという形が考えられる。すると卷五的な、比較的他者を排した形の歌巻より、多数者の歌を年代的に併存せしめる歌巻も、考えられる。むしろ万葉の常態に近い歌巻の残されようである。

何れにせよ、現在の歌巻は大件にかかりすぎている。それ以外のルートによる伝承歌は接点に乏しかったと見える。それなりに存在の可能性も大きい。

もしこれらの歌巻が現万葉と排他的に存したのなら、もう現形の序列に入るべくもないが、そうでないなら、個人的な筆録は卷五の前後にあつてもよかつた。意吉麻呂歌巻が卷五の前に、赤人歌巻が卷五の後に、というように。とにかく、卷十六に意吉麻呂の物名歌が一括してとられている。これがいきなり意吉麻呂から卷十六の編者に伝わったことは考えられないから、しかも文字までも問題にするような物名歌は筆録に違いないから、少くとも資料としては筆録物が残されたはずである。もし、それが一卷を構成する力を得れば、卷五の前後に存在したはずである。

残念ながら、これらは一卷となるだけのエネルギーをもたなかつた。そのエネルギーとは、単に自発する力だけでなく、これを文芸として認める和歌そのもののエネルギーといつてもよからう。もし、そのようなものがあるとすれば、それは第二部に一卷を主張したはずである。

たとえば卷十四とは、東国の集団歌を新しく文芸として見ようとするエネルギーによって生み出され、卷十六



は愚なる人間を見つめるといふ文芸心によって可能であつた。同様、おびただし無名歌の恋を、貫之のように嫌うことなく蒐集しようとする関心が、卷十一、十二という兩卷を可能にした。そしてまた、卷十という雅びを都市の文芸として享受する風流心もあつた。

とすれば、可能なのは、今見るごとき諸巻だけであらうか。第二部の冒頭はあまりにも晴れやかだが、その正体はやはり卷十の雅びと同質であり、すでに個人の、個別の時処にかかわる関心より、和歌それ自体に興味の中心は移っている。作者名は必然的に欠落の運命にある。第二部の中で珍しく記名歌巻は卷十五だが、これとも、いわば恋と旅という読物ふうな関心によるものであつて、傑出した作家の作として宅守らや遣新羅使人の作を享受したのではない。

このような関心を土台とすれば、古今六帖の歌々や古今集の読人知らずの歌は、当然呼び込み可能なもので、現第二部の諸巻以外にも、同趣の歌巻は多く想定できよう。

こう考えてくると、全二十巻はいかにも出し入れ可能で、現形においては不整合としかいえない。むしろそこに、万葉集の姿があると、いうべきであらう。

三

もっとも、そのようにいっても万葉集がまったく無秩序に雑然としていたのではない。最初からある意図をもつて作られたのではないが、できあがり方に従つて、おのずから反映されている性格を見ることはできる。こ

の反映とは、古代和歌史の反映であって、歌史の反映としての構成が見られることは事実である。

一見して知られるように、卷一雑歌の原形、五二番の藤原御井の歌までは、追補の部分はあるにしろ一つのまとまりをもって以下と区別できるが、これは人麻呂の歌までを主として、藤原京遷都にかかわる歌を添えたものである。

そのありさまは、卷二の相聞が人麻呂の歌まで、同じく挽歌が人麻呂の死までを主とするのと、ひとしい。挽歌はこれに寧楽の宮の歌を志貴皇子中心に加えたものである。よって雑歌・相聞・挽歌という三大部立が揃い、ともに上古から人麻呂までの歌がこれを構成することとなる。誰の目にも明らかで、私もかつて、ここまでの一群を考えたことがある。ただ、だから人麻呂の時代に原万葉が作られたと考えることはできない。すでに人麻呂の死が物語化した、次の時代、奈良朝の初期にこれらがまとめられたと考えるべきである。

これに対して、次の卷三は、原万葉を次ぐ形で人麻呂の歌から始められる。雑歌はそれから山部赤人周辺の歌まで、古来新しい歌をもって挿入されたとされる譬喩歌を除いて、挽歌も頭に古歌を載せるにしても、ほぼ人麻呂周辺のものに赤人のものを連ねて、原形(四三三)までを終わっている。以下は卷二増補の河辺宮人の歌から年代別をたてて天平歌に到っており、これを外して原形を考えることは許されるだろう。

よって卷三という、第一次形の卷一、二をつぐものが、彼の人麻呂までに対して、人麻呂から赤人までをもつて構成されていることがわかる。

さて、以上の卷一と卷三における増補だが、卷一にあっては人麻呂以後奈良遷都までのものに、さらに寧楽の宮の一首を加えたものがそれである。これに対して卷二挽歌は寧楽の宮の歌を加えており、志貴皇子薨時の金村

歌集のものが最後である。この終り方は巻一の終りが長・志貴の宴歌で終るのとひとしい。つまり、人麻呂→奈良遷都→長・志貴という区切りによって、巻一はこのすべて、巻二挽歌はこの後半だけを増補したのである。さらに巻三の増補は上述のように巻二増補と上限を同じくしつつ、下限は天平十六年の家持の時代に到る。すなわちもう一つ下の時代にまで及んでおり、右の矢印に家持に到るものを加えることができる。

すると、これら増補部においては、巻一が人麻呂に接しているにしても他は寧楽の宮をこそ区画点としていることがわかり、長・志貴らの歌、また金村の名が大きく浮かんで来て、赤人など、どこにも目立って来ない。これは、原理が大きくずれているというべきで、人麻呂、赤人という両者を結節点とする意識がより古く存在し、それによって万葉集が形成されながら、一方では奈良遷都という年代的な関心、長・志貴という皇子の尊重をもって万葉集が形成されていることになる。その双方を基本とした構成である。

これに対して、巻四はもはや何れの原理も持っていない。人麻呂も一連の中に並列されるだけで、赤人に到っては、その作すらとどめない。また金村の歌も切りとられて並べられているにすぎず、これをもって区切ろうとするものではない。押しなべて「難波天皇妹」の歌から家持周辺に及んでおり、このような異質なものを、先の巻一から巻三までの三巻と一括することは、到底できない。この「難波天皇」にしろ、次の「岳本天皇」にしろ名称の新しいもので、文献的に定着した時点も、先立つ諸巻とは別である。

それを、単に巻一が雑歌、巻二が相聞・挽歌、巻三が雑歌・譬諭歌・挽歌、そして巻四が相聞だからといって一つづきの巻々だというとしたら、何が発言されたことになるだろうか。せいぜい、いわゆる三大部立として類同するというだけで、それにしても巻二の譬諭歌が邪魔である。おのずからにして巻四であるという以外の何物

でもない。

その証拠に、ついでおかれた巻五は、ほとんど家集といってよいように、憶良あたりの身边を離れない。明らかに資料性を見せており、編集上の原理どころか、編集の意識そのものも見せていないではないか。それはちょうど、全二十巻の巻末に筆録性の強い巻十七以下の四巻があるのと同じで、これを組み込んで全二十巻の統一的な成書としての編集意図が説明しがたいのと似ている。

しかも、ここに浮かんでくる山上憶良なる人物は、以上四巻の中で主要な位置をしめる作家ではない。巻一の追補部に一首のみ歌を載せるばかりで、ここに歌史の結節点を見つけることは困難である。むしろ家持という個人の伝統の授受に関して浮かび上がる作家であり、人麻呂・赤人という線、また長・志貴という点とは無関係のものである。最後の受けとめ手が家持として共通するとしても、事は別である。

のみならず、憶良——家持という範囲を示すのでもなく、憶良周辺を広がっていかないという在り方は、歌集として基本的に違った様相をもつ。家集的だと先にいったとおり、個々人の集を、例えば後の三十六人集の如くまとめることと、多数者の作品を配列して示すということを、編集行為として混同することはできないだろう。ましてや、それを組み込んだ総体を一つの体制として編纂論上に論ずることは不可能である。

このような編纂物として異質なものは、やはり付加的な意味しかない。歌史を反映しつつ編まれた冒頭三巻に対して、並列的にそのすべてを蔽う巻四を添えたのに、更に添えて、巻五はおかれている。

したがって、巻六は以上の流れを遮断する。巻六が金村の歌から始められるのは、飛びこえて巻二挽歌の末尾増補と重なるものであり、巻一末尾の長・志貴をも、つぐものである。つまり上述「寧楽宮」以後で、赤人は現

わかれても、むしろ金村の歌に添加された形でしかない。先に述べた二つの原理の内の一つを継承するもので、人麻呂——赤人というそれではない。その点、原万葉とは別の編纂意識があり、また巻四、巻五とも無縁のものである。

この巻が金村から始まり田辺福麻呂歌集に終わっていると見ると、もはや家持とも第一義的には結ばれていないようで、ここにはまた別に、金村——福麻呂という歌史上のルートが考えられる。おのずから寧楽宮の意識、長・志貴の路線を延長したものではあっても、先立つ諸巻の見せないものであった。

金村の歌をはじめとして巻頭を飾るのは吉野離宮への行幸従駕の歌々であり、明らかに宮廷歌人麻呂の伝統を継承しようとするものではあるが、それはむしろ後人としての福麻呂あたりから溯って仰ぎ見られた(福麻呂がすべての編者だということではない)姿であり、この一巻は先代を継承しようという増・追補の意識とは別種の、金村らの歌を最初とするものであった。養老七年の冒頭について、聖武天皇が即位し、ほぼ聖武治世の初めから歌が配列される。そして吉野離宮行幸の歌から始められた一巻は、聖武の難波宮行幸およびその折の歌によって閉じられる。天平十七年に及ぶ都移り、奈良から久邇、難波へと移動にともなった歌々が福麻呂集から載せられるのであって、この巻の冒頭・末尾は、余りにも「宮」にこだわりすぎている。その点では「寧楽宮」意識をうけついで、それ以後といえるだろう。福麻呂集を除いても、「寧楽宮」の荒墟を傷惜する歌が最後である。

私はかつて田辺福麻呂という歌人を、橘諸兄の庇護による宮廷歌人で、その宮廷歌はむしろ諸兄の下に披露されたのではないかと考えたことがある。そして一方、巻十九という一巻が諸兄の歌集編纂の意図を反映してでき

上がったのではないかと書いたこともある。この二つを考え合わせると、巻六という一卷は先立つものとは年代的にも、成立の場からいっても、またかわる人間からも別種のものであり、まして上述のように文芸的な意図においても先立つものと異なる。巻の順序からいっても続かないのが巻六であって、そのすべてを無視して、これら諸巻の上に体系を考えることは、無理である。やはり、巻五という異質なものを添えたと同じように、この一卷も別種のものとして添えられたものと考えるべきであらう。

添えるといえ、もう一つ最後に作者未詳歌群を添えてすべてを終るとするのは、理解しやすい。巻七がそれである。

そして、この巻も各分類の冒頭に人麻呂集をたて、人麻呂を規範とする精神を見せている。全体の部立ても不十分ながら雑歌・譬喩歌・挽歌の体をと、巻三のそれとひとしい。しかし、一卷の主体は雑歌にあり、歌数からいっても雑歌二二八首、譬喩歌一〇八首、挽歌一四首というぐあいである。さらにその雑歌の内部も幾次かにわたって増補されていて、未整理ではあるが、その中心をなすものは、人麻呂期のものと思われる。

巻七には「古集」「古歌集」からとられた歌も多い。この両者は別物で成立も奈良朝に入ってからのもと思われる。それは、おそらく人麻呂集の成立と時をほぼひとしくするもので、七世紀後半から八世紀初期にかけての歌々が、巻七にはより多く収められていると思われる。その点、同じ無名歌群といっても、後の巻十一や巻十二よりは、より古いものである。あるいは右に述べた人麻呂——赤人、寧楽宮以後、長・志貴、金村といった特色ある時点の何れかまでを所収範囲とするかもしれない。それによって、第一部末尾に無名歌として収められる必然性が理解できる。

さて、以上のように編纂されたのが第一部であり、そこには歌史の反映が見られ、おのずからに一群をなしていた。その点では一まとまりの歌群と考えることはできるが、しかし何の出入も許さぬように緊密に統一されたものではない。

このことは、第二部と思われる巻八以後の、その冒頭の巻八が志貴皇子から始められることと、表裏一体のことであろう。体裁も新しい四季分類をもって、この巻が志貴から始められるということは、巻一、二の増補をつぐ形であり、そこに第一部を更新しようとする意識がある。秋の雑歌が「崗本天皇」の御製から始められるのも、同様である。

巻九にも第一部の格式を踏襲しようとする意識があつて、雄略御製から始められる。これをもってしても万葉集の編纂原理として働いているものは、歌史の反映という、おのずからの結果だけである。むしろ、従来各巻について述べて来た卑見の如く、巻別の意図をこそ尊重すべきであろう。

#### 四

現万葉集二十巻の成書としての意義を問うとしたら、まさにそのような各巻の意図するところにある。多くはここにくり返すことを避けるが、たとえば巻二という一卷は和歌なるもの（韻文といつてもよい）が自覚され、記紀という散文、叙事文芸と袂を分かとうとしているさまを、如実に示している。万葉集に収められているのは一首一首ではあるが、背後に歌による物語、益田勝実氏のことばによれば歌語りとよばれるものを想像せしめる。

せしめながら、なお歌を一首として享受しようとするところに卷二の文学史的な意義があり、それを愛と死とによって示そうとしたものが卷二である。その点、儀礼性に足を残している卷一より、むしろ卷二の方が自覚度は高い。

このようにして散文から袂を分かった和歌の後において、後々の諸巻を彩る如き和歌は誕生しえた。和歌を意志交換の手段として、またこの詩形において、ことばのさまざまな働きを享受しえることとなった。そのような意味においても、人麻呂という編纂上の画期は注目され、それ以前と以後とでは大きく和歌なるものは変わるといえる。右に述べた和歌の自覚とは、この人麻呂期において極点に達し、以後和歌は、その内部的な力を成長させていったといえる。

そこで大きな問題となるのは、この古代和歌を、どう捉えるかという事柄である。私は右に和歌の自覚といひ自立といったが、しかしその和歌は、今日に見られる和歌などと同質であるはずはない。このことを正確におさえておかないと、万葉集の主張やその意味を誤り捉えることになってしまう。編纂の意図も、成書としての意義も同じである。

たとえば歌学びといったことばの、目につくことがある。あるいは歌学という。そのことばは、私にはきわめて後世ふうに響く。平安時代とて和歌はそれほど特殊なわざではなかった。たしかに専門的な歌人はいたけれども、これをもって生業とするような存在ではなかった。またこれが晴れがましい第一等の文学として仰がれるということもなかった。古今集の揚言をよみ、「紀師匠」などということばをきくと、ほとんど今日のなあり方において和歌が存在したごとくだけれども、また歌が一首でも多く勅撰集に入集することは名譽なこととして欲せ



られはしたが、和歌を作ることは、それほど特殊なことではなかった。今日よりよほど会話に近いものとして考  
えなければならぬだろう。

上代においても、歌作りが特別な文芸的なわざとして認められていたかにも見える。たとえば諸兄が家持の歌  
の末尾を換え、しかし元のように誦せよといったという記事があったり、歌経標式なる歌学書があったりする  
らである。

しかし諸兄は家持の歌を添削したのではない。むしろ宴席の座興に類する行為であった。歌経標式があのよう  
に漢詩ふうな理論を与えようとして失敗していることは、和歌なるものの異質さと未成熟を示すものでこそあれ、  
和歌が日常から昇華して特殊な文学への道を辿り、到りついて理論化されようとしたものではなかった。

たしかに、歌の巧拙ということはあったろう。元正太上天皇の歌をよめという勅に対して、石川命婦以外の命  
婦は「歌を作るに堪へず」（20四四三九左注）と記されていたり、先立つ天平十八年の雪の肆宴で、朝元は「歌を  
賦うたふに堪へずは……」（17三九二六左注）といわれている。また防人歌の拙劣歌を落したというのも著名な事柄で  
ある。

しかし、だからといって和歌を特別なものと考えすることはできない。だから、養老五年に山上憶良が聖武皇太  
子の侍講となったのが、和歌を教えるためだという意見に、私は従うことができない。古く、佐佐木信綱博士は  
巻十一、十二などの無名歌と末期万葉の歌との間に類歌が多いことなどを中心として、これらの巻が歌学びの手  
本とされたものであらうとされた。類歌の捉え方は、その後高木市之助博士が古代和歌の均質性においてこれ  
を捉え、まことに見事に古代和歌の性格がいい当てられたことであつたが、にもかかわらず、この数十年以前の歌

学び説は、いまだに支持者を失っていない。

これは結局のところ古代の和歌なるものをどう捉えるかという、もっとも根本的な点によって意見が分かれるのだと思われ、いわば学者としての基本的態度にかかわることのように考えられる。私が高木説を支持するのも、またそのような基本的態度においてである。

同じようにいえば「歌壇」ということばも然りである。この語は最近の「文壇」なる語を模した近代短歌の用語を、そのまま古代に移行させたものであろうが、文壇自身が僅々五十年ほどの歴史しか持っていないのに、歌壇を千年以上前に考えることはできない。この語によって、たとえば筑紫歌壇といい、旅人周辺に和歌による特殊社会を考えるというのは、用語の不用意というにとどまらず、古代和歌そのものの認識を示すというべきだろう。

歌壇といい歌学びといい、それらの基本的曖昧さの上に万葉集の性格が云々されることは、もっとも危険なことと私は考えるのである。

同趣のことは、換言すれば作歌の現実的効用を考えることにも見られる。たとえば万葉集の編纂に政治的イデオロギーを考える説がある。漢風の藤原体制に対する和風の伝統の宣揚を、万葉集に見るといった具合である。あるいは藤原体制に滅んだものへの鎮魂の書だともいう。

これも和歌をいかに見るかという基本の学的立場によっている。たしかに文学が「経国の大業」だとする認識は中国にある。しかしそれは文章であって必ずしもここで問題とする如き文学ではない。むしろ小説稗史の類は賤しいものですらあった。わが国でも歌(歌謡、和歌)は上古において秩序あることばであり呪力をもつものであ

った。しかしそれは政治にかかわるものではない。その後中国ふうな文芸観が入ってきて、「経国の大業」を表面立てて作品集が作られるのは、平安初期の漢詩集においてであった。

貫之が古今集によって宣揚しようとしたものは、和歌の晴がましい立場だったが、これは菅原道真の意図を継承した、和歌を漢風になぞらえる試みであった。かつて和歌が人麻呂・赤人において君臣唱和の美風をもったかの如く記すことは、半ば幻想に属することであった。上代の和歌の実態からは遠い。

また、宗教的といってもよいように、万葉集を鎮魂の集と考えることもある。これまた奈良朝末期における和歌のあり方とは、よほど距った古代に属する和歌の機能であろう。万葉集の一々の挽歌について、死者の霊を慰撫する働きは否定しがたい。むしろ大事な役割であったと思うが、それは国見歌が国土を祝福し、壮途を送る歌が志を励ますのとも同じことで、しかもこの純粋な機能は逸早く滅ぼうとする趨勢にある。にもかかわらず、万葉集全体、このもろもろの要素を含み込んだものをもって、鎮魂の書と考えることは理解しがたい。

同じ現実的効用として、歌を「人生」にかかわらせて考えることもある。これまた万葉時代の歌の基本的な理解に関すると思われるが、私には時代錯誤と考えられる。近世、伊勢物語は婦女子の必読の書物とされた。この歌物語が、物の情緒を知る規範とされたからである。しかし、そのように万葉集は利用されなかった。溯って、宣耀殿の女御は幼き日に古今集二十巻を習えといわれたというが、それとて人生の目的のためではない。恋愛に和歌が必須の時代となり、仮名文学が女性に帰属するような時代であっても、なお和歌をもって人生の機微を知るといふように歌集が考えられたことはないし、ましてやそれを意図して和歌集が編まれるということとはなかった。平安初期、万葉集は女性の手をへて伝承されたようだが、これも書の手本として伝えられたようである。

総じて万葉集に現実的効用を考えることは、万葉学の戦前への逆行の如く考えられる。戦前の著述には、これに類した編纂意図論があり、研究史を繙けば誰の目にも明らかなおりである。この意見は拡大されて万葉集に勅撰を考えるに到るもので、戦後万葉学の蓄積を一挙に否定して、戦前に戻ることは許されない。事は上述の類歌と同じで、高木説を無視して溯行することができないのとひとしい。

和歌が悲しき玩具だったといえ、同じように時代錯誤の譏りを受けるかもしれないが、人麻呂以後の和歌においては、本質はさほど変っていないだろう。家持のことばでいえば「悽惻の意は歌に非ずは撥ひ難きのみ」(19四二九二左注)という、それであって、この点の認識においては啄木も茂吉もひとしかったし、表現とは何かを、とりわけて抒情詩において言ってみたにすぎないともいえる。だから、右に人麻呂以後といったのは儀礼にかかわらないという意味で、この効用を除けば、ことばのわざとは、常にそうであったはずである。

だからこそ、古今集はより高次と認定した文学の姿を庶幾する結果ともなった。この勅撰集の成立は、したがって万葉集とは全く異質なものであり、後代の人が古を仰ぐに違いないという断言をもって古今集となづける意識は、その意識において万葉集の体質を遠ざけるものであった。万葉集の中にも巻十一、十二に対して「古今相聞往来の歌」という分類名が与えられているが、これも目録での話であって、後々の処理における意識である。しかもそれとも古今にあい渉る集として名づけられた古今集の「古今」とは別物で、たまたま歌が古と今とによって編集されているにすぎない。そしてこの場合の「古」とは、単純に人麻呂集のことを指す。人麻呂集を置いて、それにならって新しい歌を並べたことが、古今に涉れという願いと径庭のあることは、むろんである。

それにして目録の「古今相聞往来」なる表現が古今集成立のころに記されたとしたら、話はおのずから別に

なってくる。もちろん内容が違うから同一にはならないにしても、用語への意識は、近づいてくるだろう。しかし古今集のころに目録が作られたとするのは、むづかしい。

これはむづかしいが、考えてみるべきは万葉集なる書名である。この名義についても従来幾度か述べた如く、多くの詞華の集とする説に私は賛成するが、万代の集、万代に伝われとの祝福をこめた集だという意見への賛成者も、少くない。私がこれに反対する理由は、作品集の名づけ方の類型にもよっていて、類聚歌林、銜悲藻、懷風藻、あるいは日本書紀、古事記、風土記等々、どの一つをとってもそんな型はないからである。

しかしこれも古今集という書名があり、後々に千載集というのがあるのだから、万葉集なる命名が古今集の時代と重なるのなら、話は別である。私はこの命名はずっと新しく、奈良末期あるいは平安初期にまで下るのではないかと記して来た。

それにしても十世紀初頭の古今集とは重ならない。それ以前の勅撰漢詩集および道真の時代を経過するか否かで大きく違ふと考えられるが、やはりこれ以前であろう。万葉集と古今集とは本質的に違ふのであって、これを混同することはゆるされない。書名の意義についても、勅撰か否かという点についても、古今の意識についてもむしろ、古今集との相違を明らかにすることこそ、万葉集独自の性格を照らし出すことになるだろうし、同じことを古事記、日本書紀についても考えてみなければならぬであろう。

記紀との相違ということは、既に和歌の自覚においてふれたが、語りと歌との相違は十分に万葉集の上に認めおくべきであろう。語るといふ叙事の精神と歌うといふ抒情のそれとは、本質的に違ふからである。古事記歌謡の中には「神語」「天語歌」と称せられるものがあって、カタルとウタフとは本質的に差がないようにも思え

るけれども、これらはカタリ風の韻文という意味だろうから、やはり両者の差を前提とした名称である。

そしてまた、上述にふれた益田勝実氏のいう「歌語り」にしても歌による語りなのだから、両者は別物である。そしてこの場合、長篇の歌によって行なわれる場合もあるが、何首かの歌によってなされることもある。磐姫の一連や大津物語らが短歌をつらね、石上乙麻呂配流のそれが短長歌をもって構成されているのが、それらを仄見せしめている。

すると問題をもってくるのは、歌語りが全体をもって一つの語りを行なうことで、これは和歌を一首ずつ別とは考えないからである。すなわち、巻一は「何首」という記入がなく、巻二以後にその見えることで、一首ずつを一単位として「何首」と記されることにおいて、歌はより明確に自立したというべきだろう。語りに奉仕する歌からの漸次の成長を、この中に見てとることができる。

かくして語りから区別された和歌は、もっぱら内心を表現することとなる。事と心との相違が対象にあるといってもよく、歴史からの文学の独立といってもよいだろう。歴史から離れるということは、関心の中から時間が剝離するということでもあり、一点の普遍という別種の拡がりがあることとなる。

こうした変質は人間へのより強い関心でもあり、当然のこととして相聞・挽歌という二大分類が登場してくる。愛と死とは人間がつねに最大の関心を抱きつづけてきた事柄である。それ以外のものは、雑歌としか言いようがない。その点において、記紀と万葉集とは截然と区別されている。

万葉集が何よりも人間であることを訴える作品集だとすれば、歌とはまさに「悽惻の意を撥」うものでもあったし、君臣の唱和とか万代への言揚げとかといったこととしい掛け声とはうらはらの、内発的なものであった

ろう。そうした和歌を集めたこと、それが万葉集を編んだということであった。それ以上でもそれ以下でもあり得なかつた。

そのさまは、ちょうど懐風藻の編纂と似ている。この編纂も序文に語られるところは先代の遺風を慕う点にあるし、懐風藻という名自体がこれを体现してはいるが、そのさらに根本にある志は、いみじくも川崎庸之氏が言い当てたように、ただ編んでみるという、その事ではしなかつた。およそことばに關するわざとは、そうした行為なのである。だから、ことばそのものについてはもつと端的であつて、平安朝の「あめつち歌」の作成を、同じように作つてみるというそのことに目的があつたと亀井孝氏がいわれるのと同じである。

万葉集も、原万葉の冒頭に行事折々の歌を若葉摘み、国見、葉狐と並べる段階や、宮から宮へと首尾を整えようとした意識には、特別の意図を認めてもよい。しかし全二十巻をもつて何事かを簡明しようとしたのだという考え方は、ことばのわざから言つても、古代和歌のあり方からいつても、著しく外れているのである。

## 五

およそ以上の如く、万葉集という作品集を私は考える。全二十巻はけつしてこれ以外の形への変化を許さないものではなく、きわめて不整合の諸巻を連ねたものであつた。一々の巻については複数の編纂原理を有しており、しかもその原理は、和歌史の継承がおのずからに生んだものであつて、意図的なものではなかつた。もしこれを意図されたものだとしたら、何と破綻の多い意図であり、何という悲惨な結果であつたらう。むしろ一卷ごとに

こそ、意図の感じられる場合があり、それなりの評価はできる。また部分的・資料的にそれを指摘することはできる。詳しくはすでに述べたところである。

したがって全二十巻をもって緊密体と考え、これに現実的な効用を考えることはできない。それは根本的に古代和歌の誤認から生じていると思われ、幸いに戦後万葉学の克服してきたものだったと考えられる。むしろ、普遍的な和歌の性格、比喩的にいえば「悲しき玩具」としてのそれを、それとして一巻ごとに編んでみるという行為にこそ、ことばにかかわるわざとしての本質があり、それを驚くほど多面的に示しているところに、万葉集の意義が存したと思われる。